

「のらぼん(野良盆)」に垣間見た豊かな精神世界



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

山梨市牧丘町で子どもの田舎体験教室を始めて、20年近くが経過した。新型コロナウイルス発生以降は、1泊2日の合宿形式での開催は避けて日帰りとし、それまでは子ども中心で大人はボランティアとしての参加にとどめていたのを、親子での参加を基本にした。その良しあしはあるが、子どもだけでなく田舎体験に熱心な親も少なくないというのはうれしい発見であり、今年3月下旬のジャガイモの植え付けを柱とした田舎体験教室は、参加が45人を超える大盛況となった。民家を借りて会場としているが、昼食のカレーライスは、これまで大きな釜一つでカレーを賄ってきたものの、この人数ではということで、初めて釜二つを利用して乗り切った。

当日はあいにくの雨でジャガイモの植え付けはできず、行動は家の中だけに制約されたのであるが、家内がたまたま出会ってお声掛けした秋田万歳の万歳師、斎藤ぼんさんが足を運んでくれて、皆で秋田万歳を鑑賞した。正月から春先にかけて家々を鼓をたたきながら門付けし、その家をたたえ、長寿・繁栄などを祈念する口上を述べながら各戸を回るもので、改めて正月気分を楽しんだ。

終わってから斎藤さんに話を聞いたところ、各地のお祭り、盆踊り、民俗、民謡などが好きで、「にゃんとこ」なる看板を掲げて、催しの企画・運営もしておられるという。そうした活動の一つとして、各地の盆踊りを皆で踊る「のらぼん(野良盆)」なる集まりを、東京の小金井市新小金井にある公民館で3月末に予定しているということで、お誘いいただいた。

ちょうどその日に開かれた、日本オーガニック会議をプラットフォームに活動している団体などによる、食料・農業・農村基本法の見直しについての農林水産省との意見交換会が大幅に予定時間を超過したことから、だいぶ遅刻となったものの、のらぼんをのぞいてみた。着いた午後7時半ごろは十数人が踊っていたが、次第に数は増えて、途中で失礼した時間には30人ほどに。大きな和室で、野良の雰囲気醸し出して照明もかなり落とした上で、丸く輪をつくってぐるぐる回りながら踊る。顔を出した時点では郡上おどりの各種が、そして江州音頭、河内音頭などが続く。一重の輪が二重になり、レコードの唄から肉声の唄に代わり、唄い手と踊り手の掛け合いも入る。概してスローテンポのものが多く、軽妙なテンポのものも混じる。踊りが進むにつれて、三昧というか一心不乱というか、俗事を離れて皆が一つにまとまってくるような雰囲気が醸し出され漂っていた。



「のらぼん(野良盆)」での郡上おどりの風景

ここで取り上げられた踊りは概して古い踊りのようで、中世、さらには古代にまでさかのぼるような要素を持った踊りであり唄のように感じ、いにしえの共同体の祭りをほうふつとさせるものがあつた。本来、これらの踊りと唄で、人々は仲間たちと交歓するとともに、先祖とも交感していたのではないかと。まさに折口信夫が開示した世界であり、日本人、古代人の豊かな精神世界と文化を垣間見た思いがした。今、若い人たちがこうした世界にも関心を寄せ、またこうした集まりが、しかも東京で行われていることに驚かされた。時代はらせんを描きつつ変化しているのではないかと。



蔦谷 栄一 (つたや えいち)

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入庫、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」(以上創森社)
「日本農業のグランドデザイン」(農山漁村文化協会) など